

氏 名 挽地 佳恵  
学位の種類 博士(文学)  
報告番号 乙第300号  
学位授与年月日 2014年3月31日  
学位授与の要件 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)  
第4条第2項該当  
学位論文題目 「長崎」イメージの形成と「私たち」——土地の名に働きかける  
——  
審査委員 (主査) 林 淑美  
林 みどり  
川口 隆行 (広島大学大学院教育学研究科言語文化  
教育学専攻准教授)

## I 論文内容の要旨

論文名 「長崎」イメージの形成と「私たち」——土地の名に働きかける——

### (1) 論文の構成

#### 序章 「私たち」とは誰か

- (一) 二つのエッセイ
- (二) 「福島」の当事者たち
- (三) 「私」の企図

#### 第一章 「長崎」という土地の名の問題

- (一) 南蛮・唐・紅毛のカクテル——代理＝表象の欲望①
- (二) 名菓カステラ——代理＝表象の欲望②
- (三) 「長崎＝カステラ」となるまで
- (四) 連続性＝同質性の罫
- (五) 『邪宗門』と「長崎」

#### 第二章 長崎点描——明治一〇年代～四〇年代

- (一) 「桜の港」キャンペーン
- (二) 『増補再版 新々長崎みやげ』書評
- (三) 俳句題目「絵踏」
- (四) アーネスト・サトウ
- (五) 東大史学会
- (六) 地元知識人たち
- (七) 「南蛮」という語

#### 第三章 南蛮趣味の登場と流行

- (一) 南蛮趣味登場
- (二) 『女学雑誌』——同時代の中で①
- (三) 先行する詩作品——同時代の中で②
- (四) 南蛮趣味流行

#### 第四章 モノ化する「長崎」イメージ

- (一) 書物
- (二) テキスト
- (三) 歌謡曲

## **第五章 「長崎開港記念日」の成立—「長崎」の落ち緋拾い①**

- (一) 第一回長崎開港記念式
- (二) 明治四〇年の「長崎デー」
- (三) 「元龜二年四月二七日」の根拠
- (四) 「長崎」は誰に始まるか
- (五) 内と外
- (六) 「長崎」はどこに始まるか
- (七) 記念日のその後

## **第六章 事変下の長崎—「長崎」の落ち緋拾い②**

- (一) 長崎と上海の一九三七年
- (二) 小説のなかの「混乱」
- (三) 中国人の呼称をめぐって
- (四) 日華連絡船と届かない手紙

## **第七章 原爆前と原爆後**

- (一) 不変の歌詞世界
- (二) 戦後長崎の復古調
- (三) 浦上の聖者
- (四) 永井隆を擁した三者
- (五) 包摂される主体の問題

## **第八章 文学同人誌『地人』—「長崎」の落ち緋拾い③**

- (一) 「原爆（文学）」研究の意義
- (二) 北九州市民・日本国民・人類
- (三) 視角と死角、来た道と行く道
- (四) 典型的表象との格闘
- (五) 山田かん・野地伸生・井上光晴

## **第九章 長崎をいかに語るか**

- (一) 風景と場所
- (二) 風景の消費、その問題点
- (三) 擬態を二重化する
- (四) 長崎人の複数性
- (五) 内破される書物空間
- (六) 典型的表象とともに

## **終章 「私たち」を諦めない**

- (一) 見取り図
- (二) 落ち綿拾い
- (三) 残る課題
- (四) 編まれゆく「福島」と「長崎」

## **初出一覧**

## (2) 論文の内容要旨

本論文は、「長崎」イメージの形成と「私たち」という主題のもと、日本近代における「長崎」の表象を考察し、ある特定の土地に対して「私たち」が共通して抱くイメージの構造と機能を分析したものである。小説や詩をはじめとするさまざまな文学表現、歴史学や文化人類学の知見、ガイドブック、新聞・雑誌の記事、広告、歌謡曲など、「長崎」をめぐる様々な領域を横断するかたちで、ある固有のイメージが形成されており、それぞれの時代ごとの(あるいは各時代を貫く)支配的言説が存在している。だが、様々なテキストを詳細に分析していくと、支配的言説を相対化したり複数性を志向したりする言説が抹殺・封印されてきた歴史が見えてくる。本論文は、そうしたテキストの裂け目を通して、それぞれの土地の名とともに生きる個々の「私」が「私たち」という妄想によって蔽われていく過程を追認するとともに、世界を「私たち」という主語をもって認識するためには何が必要なのかを探究したものである。

第一章では「長崎」が代理＝表象を可能とするような全体性を備えている現状を確認し、その土地イメージの連続性を疑問視する見方を示している。それを踏まえて、第二章から第四章にかけて、近代の南蛮趣味が「長崎」イメージの形成に果たした役割を考察している。第五章では昭和初期に「長崎開港記念日」が決定された際の問題含みの光景を、第六章では上海事変下のガイドブックに不可視となっていた光景を照らしだしている。第七章から第九章では、戦後長崎の復興が南蛮趣味を下敷きにしていた側面に注目し、当時の支配的な言説と対抗的な言説の有り様、および近年の、「原爆都市」という定位に基づく、「長崎」や「原爆」と関わる表象・物語にみられる戦略を論じている。

なお、五章・六章・八章には「長崎」の落ち綿拾い」という副題が付されている。この三つの章は、「長崎」という均一な布地に組み込まれなかった「規格外の繊維片」をテーマに据えている。それらを拾うように過去の痕跡に触れ、土地イメージが人為的に形成された産物であることを確認すること、拾い集めた綿からひとまとまりの布を編み、自ら土地イメージに働きかけること。それがここでの目論見である。以上を経て、終章では、そうした「落ち綿」なるものへの関心を通じて、「私たち」が土地の名とともに生きるとはどういうことかという問題編成を試み、それを問い続けることの重要性を考察している。

## Ⅱ 審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

申請者の研究は、Ⅰ 明治～戦前・戦中期における長崎の表象を通史的に論じた部分、Ⅱ 原爆都市として再生していく戦後の長崎を様々な文学・文化運動、原爆文学の読解などから考察した部分、Ⅲ 近代の長崎をひとつの統一的なイメージで束ねようとする力学に抗して「規格外の繊維片」として表出する言説群に関する分析、という三つの観点で構成されている。Ⅰでは、長崎における「南蛮趣味」の系譜とそれを促した同時代のアカデミズムのありように関する考察、南蛮趣味流行を経た長崎が、「エキゾチシズム」を大黒柱にそのイメージを編成し固定化していく過程に関する諸テキストの考察、観光都市・長崎の案内記と、上海事変下に書かれたルポルタージュ小説との比較などを通して浮かびあがる、「ロマンチシズム」の語られ方に関する考察がなされている。新詩社同人による紀行文「五足の靴」と詩作品、その後の新村出と芥川龍之介を軸とした「南蛮趣味」の流行などを追跡し、明治期南蛮趣味と大正期南蛮趣味が、国史・国民・国語を創出しようとする同時代言説との関係性において対照的であることを示した点などに特徴がある。Ⅱでは、戦後の長崎が、「復古調」と評される姿勢で過去の文化遺産をイメージの中心とし続ける様子、原爆被災が「南蛮趣味」的な要素として位置づけられていく過程で大きな役割を果たす永井隆の言説に対する批判的な考察、永井隆の言説と格闘した文学同人雑誌「地人」、および、その雑誌をベースに活動した山田かんのテキストを読み解いている。詩や小説の解釈はもとより、雑誌アンケートの分析なども織り交ぜることで、長崎をめぐる言説の「裂け目」を具体的に捉えている。Ⅲの要素は論文全体を通して言及されているが、その特徴は、長崎という「土地」、「場所」、「風景」などが日本の近代において冠せられてきたイメージ、および、そのイメージを継承しながら生きてきた「私たち」のありようを問題化し、「私たち」が土地の名とともに生きるということとはどのようなことなのか、そこからどのような問題が屹立するのか、という議論を展開している点にある。

### (2) 論文の評価

審査の過程では、素材に対する目配りの広さ、敢えてインターディシプリンに取り組む姿勢、斬新なテーマ設定などが高く評価された。また、文学研究をベースとしながら歴史学・文化人類学・社会学などの知見を柔軟に吸収し、それを再び文学の問題として捉え直す論述方法に関して、やや論理性に欠ける部分があるものの、注目すべき記述が多々あり意欲的な論文であるとされた。個別の問題としては、明治期から昭和戦前期にかけての「南蛮趣味」、及び、それがアカデミズムや文学と結びついたところに派生する「エキゾチシズム」、「ロマンチシズム」の様相を論証している点に関する評価が高く、単著としての刊行が可能であろうと判断した。今後更に広い目配りをおこない、長崎をめぐる言説がなぜひとつのイメージを形成していくのかという「言説の構成力」に関する分析を深めるとともに、「オリエンタリズム」の概念などに関する理論的枠組みを緻密にしていくこと、また「私たち」という主語が孕む危険性を認識した上で更にその問題性を探究し、思考を普遍化するための言葉が鍛えられていくことを通じて、いっそう意義の深い研究成果が期待されるだろうとの評価も下された。